

夏のはじめに

— 広島芸術学研究会昭和六十二年度活動報告 —

八 田 典 子

窓を開けると家々の屋根の向こうに鮮やかな緑が見える。川沿いの小公園に立ち並ぶ桜や楓の葉群だ。まだ若葉の淡さを残しながらも、豊かに繁った木の葉はのびやかな力に満ち、風に揺れるたび葉先できらめく陽光はすでに夏のものだ。

広島芸術学研究会が発足して早くも一年が過ぎようとしている。この間、会員諸氏の熱意に支えられ、時々の事務的な苦勞はありながらも、順調な歩みを続けることができた。現在、会員は六十一人。芸術系諸学の参集という発足の主旨にふさわしい多彩な顔ぶれとなっている。発足の大会及び、四度開かれた例会において、会員による研究発表七回、パネルディスカッション一回が行われ、また、会員の小論文（例会での研究発表の要旨等）や次回例会の案内を載せた「広島芸術学研究会報」（以下「会報」と略す）も第四号まで発刊された。

雑感も交えながら、この一年の歩みを記しておきたい。

▼昭和六十二年七月十八日（土）

午後二時より六時四十五分まで広島県立美術館講堂にて設立総会及び大会が開かれる。参会者六十余名。総会では会の基本性格、会則、役員、活動方針等を審議決定。また、日本学術会議芸術研連代表委員の山本正男氏より会の発足によせて感銘深いごあいさつをいただく。引き続き開かれた大会では、さっそく会員の斎藤稔氏（広島大学・美術史）、幣原映智氏（広島大学・音楽学）が、それぞれ「諸芸術の饗宴」「バロック様式の音楽における演劇性」と題して研究発表を行った。斎藤氏は、パルテノン神殿から厳島神社に至るスケールの大きな内容を、スライドを交え、熱意あふれる語り口で展開。本研究会の活動開始の口火を切った。続く幣原氏の発表では、同氏を含む四名が復元された古楽器によりテレマン作曲「ソナタニ長調」を演奏し、典雅な調べが参会者を魅了した。（ただし筆者は話に聞くのみ。この後開かれた懇親会の準備のため聴きそびれ、残念であった。）

▼九月一日(火)

「会報」第一号発行。掲載記事は設立総会での山本正男氏のあいさつ
要旨「設立総会によせて」の他、「開かれた運動体を目指して」(金田
晋)、「第一回総会・大会の報告」、「市民の立場から」(設立総会へ
の参加通知状の余白から抜粋)、「広島の新しい文化的活力への期待」
(井野口慧子)等。

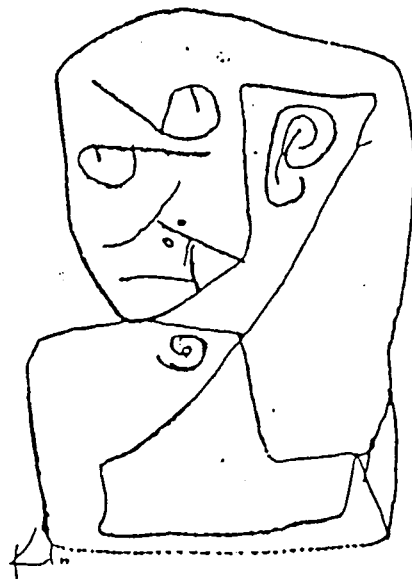
▼九月十九日(土)

午後二時三十分より五時まで、広島大学総合科学部三〇五号視聴覚教
室にて、第一回例会が開かれる。「空間の造形」を統一テーマに、水田
一征氏(広島工業大学・建築意匠)と出本正彦氏(ファッション・デザ
イナー)の二名が発表。水田氏は「自己・身体・建築」、出本氏は「若
手ファッション・デザイナーの世界とその周辺——今なぜD・C・ブラン
ドなのか?——」と題し、教室の視聴覚機材も活用して論を展開した。
建築とファッションの顔合わせは、ハード、ソフト両面からの、生活空
間へのアプローチとなり、参会者に新鮮な印象を与えた。異なるジャン
ルの競演、交流により新たな知的好奇心を喚起する場としての、研究会
の可能性があらためて示された第一回例会であった。参会者約五十名。

▼十一月十一日(水)

「会報」第二号発行。掲載記事は、第一回例会での研究発表要旨の他、
「安楽と補助の椅子、および《堪えに堪えて!》」(大井健地)、「第

一回例会報告」、「第一回国際音楽セミナーの報告」(J・ベニテズ)
等。



クレー 《堪えに堪えて!》

▼十一月二十八日(土)

午後二時より五時まで、広島大学総合科学部三〇五号視聴覚教室にて、
第二回例会が開かれる。統一テーマは「都市」。水島裕雅氏(広島大学・
比較文学)と国本善平氏(広島市文化課・都市文化)が、それぞれ「文
学に現れた都市像—ロンドン・パリ・ワルシャワ・東京」、
「都市景観づくり・広島市の実践」と題し研究発表を行った。参会者約
四十名。第一回例会と同じく視聴覚機材を効果的に使って展開された両
氏の発表は、「都市」というものに内と外から迫る興味深い内容であっ
た。会員の多くが生活の場としている広島市が論じられたこともあって、
発表後、会場より両氏に次々と質問が出され、活発な論議が続き、時間

切れ散会が惜しいほどの盛り上がりを見た。筆者もまた、昨今どんどんきれいに整えられてゆく広島市を身近に感じる者の一人として、美しく清潔に整備された都市環境は生活上確かに快適な、歓迎すべきものと思いつつも、同時に、芸術創造の土壌としての都市には、人間の気配りの行き届かないあいまいさやほの暗さ、一種デモニーニッシュな部分も必要ではないか、と自問しつつ、会場を後にした。

▼昭和六十三年二月一日(月)

「会報」第三号発行。第二回例会での研究発表要旨の他、「愛——雑情報の多いデザイン分野より」(大橋啓一)、「『太平洋を越えた日本の画家たち展』を開催して」(高木茂登)等掲載。

▼二月二十七日(土)

午後二時より五時まで、広島県立美術館講堂にてパネルディスカッション形式で第三回例会が開かれた。テーマは「展覧会〈見る側・見せる側〉」。見る側として中国新聞文化部の寺本泰輔氏、見せる側として広島県立美術館学芸課長の倉橋清方氏、同じく見せる側(あるいは作る側)として画家の田谷行平氏が出席し、広島修道大学の香川不苦三氏の司会で話が進められた。明快なテーマにまさに日々美術の現場に身を置くパネラーを得て、開催前から期待のもてる例会であった。参加者は約八十名。話は、美術館やギャラリーのあり方、文化行政の問題点、芸術作品の見方、個展と団体展の問題など多岐にわたり、後半は参加者からの質問を中心

に進められた。特に寺本氏が展開した作品における技術優先論に意見が集中した。全体に、それぞれの立場から生じる見解の相違が明らかになった段階以上には議論が高まらなかった印象であったが、それだけに、参加者各々の胸中にはかなり明確な自分の意見が生まれていたように思う。例会の後、近くの居酒屋で開かれた二次会には約二十名が参加。くつろぎながら、引き続き論戦を交えたと聞く。

▼五月二十日(金)

「会報」第四号発行。広島県立美術館の角田新氏による「第三回広島芸術学研究会例会報告」の他、「原爆ドームの美をさぐる」(杉本俊多)「第四回例会『蔵島の芸能と古面の美』予告」(原田佳子)等掲載。

▼六月四日(土)

午後二時半より五時まで、第四回例会が蔵島神社で開かれた。当日晴天。広島女学院大学の原田佳子氏の研究発表の後、開催中の宝物名品展「古面の美」を鑑賞し、さらに特別に桃山、江戸時代の能狂言装束を拝観することができた。緑深き歴史の地で名品に接しながらの、実り多き例会となった。参加者約五十名。
以上が発足以来今日までの本研究会の活動である。いよいよ二年目。春日の中で芽吹いた草木がたくましい成長を始めるこの季節、広島芸術学研究会のさらなる発展を期す。

(はった・のりこ 広島県民文化センター)